
卒業

二天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卒業

【Nコード】

N7287J

【作者名】

二天

【あらすじ】

クラス中で泣きあつた卒業の日の物語。

僕は昨日大好きだった学校を卒業した。

そしてそれは、学校を卒業したと同時に今までの学校生活が思い出へと変わっていくことをも意味していた。

涙で描かれた卒業式の次の日は、乾いた日だった。心には何もなく、朝起きてから寝るまでが空っぽの時間。そんな日のように思えた。今、僕は自分の部屋にこもっている。まだ朝だというのに部屋は暗く、それが今の僕の心にぴったりだった。

昨日よつぽど泣いたのだろう、目のあたりが痛い。

しかし僕はそんな痛みよりも、心の痛みのほうを思っている。

心の痛みを思いながら、やはり昨日のことを思い出し、涙を流すのであった。

僕を慰めようとする奴はこの部屋にいない。

「よう！ついに卒業だな！！」

教室に入って一番最初に話しかけてきたのが、入学して一番最初に友達になった「たっちゃん」だった。たっちゃんとは色々なことをしたものだっとなと懐かしと思う。部活動とともに燃え、勉強で張り合い、喧嘩をしたと思ったら急に恋の話をしたり・・・この学校

で一番多く笑い合った友達でもあった。

「おはよう」

僕はいつもと変わらない挨拶をした。

「なんだよー今日は卒業式なんだぞー！もっとなんかねえのかよ」

「なんかって・・・」

「まあいいや、俺達も今日で最後だな」

「うん・・・」

「お前、卒業式で泣いたりすんなよ？アハハハ」

「な！？お前こそ泣くんじゃねえぞ！！ハハハ」

二人は笑い合った。これはいつもと全く変わらなかった。

お互いに周りを気にせず、大声で笑い合う。何よりも気持ち良かった。

その笑い声を聞いて、次に僕に話しかけてきたのが秋ちゃん。秋ちゃんも僕は僕とたっちゃんの好きな人。

勉強の張り合い、部活とともに燃えたりしたのはみんな秋ちゃんの影響だったのだ。

「秋ちゃんは自分のものだ」とたっちゃんと僕は喧嘩をしょっちゅうしていたが、とうとうどっちのものにもならなかった。

「元気な2人だわあ」

「秋ちゃん」

僕とたちちゃんは同時に言った。それを聞いて秋ちゃんはただ笑うだけで、僕とたちちゃんは心になにかずっしりと重いものが溜まったように何も話せなくなり、ただもじもじしていた。

「今日はいよいよ卒業！今の気持ちを教えてよ」

秋ちゃんの言った言葉に、僕とたちは向き合い、目でお互いの思っていることを伝え合った。

——お前なんか言えよ、秋ちゃんが聞いてるんだぞ！！

——お前こそ何か言えよ、びびってんのか？ダッセー

確かに目と目で伝え合った。親友だからこそできる事かもしれない。

・

秋ちゃんは詰まらなくなったのか、「さえちゃん」といって別の所へ行ってしまった。

「お前のせいだぞ」

これはどっちが言ったのか分からない。ただお互に反省をした。

式の時間が来て、僕たち卒業生は体育館へ来た。

卒業生は体育館の前の席で、後ろに在校生と卒業生の親達が座っている。体育館の空気は重かった、式の間は沈黙が続き、親達はビデオを撮るかハンカチで涙を拭うかのどちらかだった。また、在校生は眠気との格闘をするか、隣の人へちよっかいをかけるか、友達同士で話すか、ろくでもない奴らばかりだった。

——卒業式は退屈だった——

式が終わり、クラスの皆は教室へ帰ってきた。

この時は誰も自分の席を離れたりする人は無く、誰の話す声も無かった。

——皆別れを感じているんだろう……

——たっちゃんも暗い顔をしてら……

僕はクラスの皆の顔を見た。

すぐ頭のいいやつ、嫌いなやつ、授業中よく先生に喧嘩をうっていたやつ、今までに三桁の数くらい告つてことごとくふられ続けてきたやつ……

暗かった。中には涙を流す女子もいた。僕はそれ以上皆の顔を見ることは出来なかった。

それから5分と経たないうちに先生が入ってきた。

「最後の学活を始めます」

先生も暗かった。

「皆今まで良く頑張ったね・・・卒業おめでとう」

そうして先生は泣いた。

その先生に釣られるようにして皆も泣いた。もちろん僕も例外ではない。

「先生・・・いままでありがとうございましたあああ！今までの日々、絶対に忘れません！！・・・うう」

誰が言ったのか分からない。

「ううッ」、「うああー」、「わあああ」

そんな叫びが教室中に響いた。中には貰った卒業証書で涙を拭う人さえあった。

そんな中で、秋ちゃんが急に号令をかけた。

「きりーっ！！」

誰もびっくりする人はいなかった。みんなはそのそと立つ。

「今までお世話になった先生に心をこめて感謝します・・・ありがとうございました」

「ありがとうございます」

これが皆が息をあわせた最後の時だった。

あれから皆はそれぞれの卒業証書をもって教室を出て行った。
最後に残ったのは僕とたちちゃん・・・お互いに涙を見せ合い笑い
合ったのをはつきりと覚えている。

僕はある決心をして、自分の部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7287j/>

卒業

2011年8月10日18時57分発行